
ポケットモンスターの可能性

yugata

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ポケットモンスターの可能性

【Nコード】

N8394V

【作者名】

yugata

【あらすじ】

機械とは本当に奇怪である。プログラム通りに動いているので人間の言うことは聞かない。しかし、たまに人間の言うことを聞く機械もある。その不思議なことを踏まえての不思議なポケモンの物語

ものがたりのものがたり（前書き）

ツヤガ「はい。こんにちは。私は作者代理です。詳しいことは他の小説で。今回は友人がポケモンの小説を書けばどうたらと言ったのでお試しに書いてみました。この小説が続くのか分かりませんがよろしく願いします」

ものがたりのものがたり

主人公「また最初からか」

ゲームの主「ポケモンって最初から始めると何故か飽きずに楽しめるんだよな」

オーキド「この世界は」

いつも通り台詞はスキップされる。そして名前が決まる

ゲームの主「どうしよっかな」

主人公「（また、レッドとかサトシになるのか）」

ゲームの主「ん〜。今回は、これでいこう。クズな主人公、クーズだな」

だが、その瞬間アドバンスの電源が切れる

ゲームの主「！？あれ。つかないぞ」

クーズ「なんだ？バグか。これで操られなくて楽だな〜。ていうかクーズは無いだろ」

天の声が聞こえる（台詞が出る枠が急に出てくる）

¥#+*^`´””々々ゞゝ あ・・・あ、あ。これで喋れるか。デハハナソウカ

クーズ「さっきまで片言じゃなかったよな!？」

ウルサイ。ダメレクス

クーズ「クズじゃない。クーズだ」

クズ、ハナシヲシヨウ。オマエガクリアシナイトコノゲームハナオ
ラナイ。イヤ、オワラナイトイッタホウガイイカ

クーズ「？何を言ってるんだ！」

イツカワカル。ソレマデテキトーニガンバレ。クズ

そして急に消えた

クーズ「・・・とにかく最後までクズ呼ばわりだったな」

急に周りが明るくなる。そこは見慣れた、このゲームの主人公の部屋

クーズ「やるしかないな」

いつもは主に操られて動くクーズだが今回は自分の意思で動ける

クーズ「じゃあ早速きすぐすりを・・・!!」

ボックスにはハイパーボール999個だけが入っていた

クーズ「・・・」

謎の人物「クーズ。朝御飯よ」

階段を上がってきたのはお母さん、ではなかった

クーズ「……誰だ。テメー」

謎の人物「あら、酷いわね。貴方の母親の、マグマ団のしたっぱ（女）じゃない」

外見は、主人公であるクーズと同じ歳くらいだ

クーズ「（！そうか。今はバグでこの世界が壊れてるのか。だからって、これはないな）」

ゲームの主は様々なポケモンシリーズを同時にやっていたのでゲームが他のシリーズのゲームを覚えていたのだらう。それはクーズも同じであつた

クーズ「しょうがない。バグの中でもクリアしなくちゃな」

母親？「クーズ。昼飯出来たわよ」

クーズ「はやっ！まだ朝御飯も食べてないよ」

クーズ「しかし、いつもだったら草むらに入ればオーキド博士が来るが」

そもそも草むらがない

クーズ「どうするか。せめてポケモンを持ってないと」

持ち物はハイパーボールが99個ある

謎の人物「おい、クズ。ポケモン貰ったんだからバトルしようぜ」

クーズ「(まさか、この声は)・・・グリーンか」

グリーン「よう。バトルは知ってるだろ？よし勝負だ！」

グリーンはライバルの名前だ。何故かグリーンになっている

クーズ「ポケモンが居ないんだが」

オーキド「こら！ポケモンを持ってないのに草むらに入るんじゃない。・・・む。まだまだじゃの。もっと草むらに入って色々なポケモンを探すのじゃな」

クーズ「オーキド博士！？しかも台詞がごちゃ混ぜ」

グリーン「俺はチャンピオンになったんだよ。見せてやるぜ。最強の俺様を！」

クーズ「(くつ。突っ込みが追い付かない。だったら)」

逃げるコマンドを選択した

マサラタウンに居たがトキワシティに逃げた

クーズ「はあはあ。疲れた」

一気に駆け抜けたので息切れしている

クーズ「ランニングシューズは無いのかよ」

「ピッチュ！」

クーズ「？」

「ピチュ、ピチュ」

下から鳴き声が聞こえてくる

クーズ「この鳴き声は確か」

ピカチュウの進化前、ピチューだった

クーズ「凄いな。カントーなのに色々なポケモンが出るのか。よし、早速GETだぜ」

手持ちいっぱいハイパーボールを投げまくる

しかし、全て避けられる。そして、でんきショックを喰らい上手に焼きましたー！！

クーズ「くっそ。せめて手持ちにポケモンがいれば・・・！？」

いた。いつからいたのか知らないがいた

クーズ「ドジョッチ・・・だど・・・（水、地面、だからピチューには

有効だが何故ドジョッチを選んだんだ、このバグゲーム」

クーズ「考えても意味ねえな。いけ！ドジョッチ！」

「ドツ・・・ドジョ」

クーズ「水（泥沼）がないから死にそうだー！！」

そんなドジョッチにピチューはでんきショックを放つ。もちろん効果はない

クーズ「くっ。とりあえず、ドジョッチ どろばくだん！」

あのハイパーボールを避けたピチューがドジョッチのどろばくだんを喰らった。泥が目に入り命中率が下がる

クーズ「よし、そのまま。みずてっぽう」

体中の水分を頑張つて集めて圧縮した水を放つ

「ピチューー！！」

でんきショックでみずてっぽうに応戦した。だがドジョッチの勝ちだった。しかし威力の落ちたみずてっぽうを利用してピチューは目を洗った

クーズ「今だ！」

すかさずハイパーボールを投げる

ピッ

ピッ

ピッ

ポーン

クーズ「よっしゃ。ピチューを捕まえたな」

ボールを持ち一度出してみる

「ピチュー!!」

出てきた瞬間、クーズの腹にダイレクトアタックを決める

クーズ「うっぐ・・・こいつ」

こんなやりとりをしている間にドジョッチは、どんどん弱っていった

ものがたりのものがたり（後書き）

ツヤガ「早速、キャラ設定!!」

クーズ（男）

見た目は赤、緑、青の主人公。名前をレッドにしようかと思ったが、なんとなく止めた。（ライバルはグリーンなのにな）
性格はアニメのサトシに近付けようかと

クーズ「しかし、ライバルは完全に俺のことクズって言ったよな」

ツヤガ「まあ、いいじゃないですか。クズなんだし」

クーズ「はー？俺はな。ゲーマーであるゲームの主にも何回も操られながら何回もチャンピオンになったんだぞ」

ツヤガ「そうですか。まあ、そうですか」

クーズ「（こいつ、ムカつくな）」

ツヤガ「それではこの辺で。ばいばい」

ものがたりのポケット

クーズ「ドジョッチー!!」

今、ピチューをボールによやく入れたがドジョッチが干からびている

クーズ「早く。ポケモンセンターに」

だがポケモンセンターの場所を見た瞬間、固まった

そこには、ポケモンジムがあった

クーズ「あれ？トキワは最後のジムだったよな。え？じゃあジムがあった場所は」

ポケモンセンターがあった

クーズ「あゝ。入れ替わってるのか」

そして入れ替わったポケモンセンターに入る

謎の人物「よく来たな。クーズよ。お前は私を何度邪魔す」

ブーン（ドアを開けた音）

クーズ「なるほど。あれはジムだったのか。サカキが何か言ってたが無視だな。そうするとジムの形したポケモンセンターが本物か」

ジムに行く。だが開かない。原作ではジムリーダーが留守で開かない。そう、だから、こちらも開かないのだ

クーズ「・・・回復出来ないんですけど」

だが幸い草むらが無いので野生のポケモンには会わない

クーズ「ん？待てよ。このバグゲームなら酔っ払いのオジサン居ないんじゃないか」

いつもいる場所を見る。そこにはポケセンの受付のお姉さんがいた

クーズ「え？・・・回復出来るんですか？」

ジョーイ（名前合ってる？）「はい。こちらにポケモンを渡して下さい」

クーズ「あ、はい」

てん、テン、テロリン

ジョーイ「はい。皆元気になりましたよ」

クーズ「（浮いてたよな。ボールが浮いたよな）」

バグで機械は見えないらしい。だから浮いたように見えたのだ

クーズ「このゲーム。本当に大丈夫かよ」

そして次の目的地トキワの森に入る

クーズ「!？」

目の前から飛んでいる大量のむしとり少年が来た

クーズ「!!!何これ。とにかく逃げろー」

ゲーム説明：上から来るむしとり少年を避ける。自分が移動出来るのは右か左だけだぞ。むしとり少年は早い奴や遅い奴がいる。惑わされずいこう

クーズ「ふ〜。別ゲームになったな」

難易度は低かったので問題なくクリアした

そしてニビシティに着いた

クーズ「流石にポケモンのレベルを上げないとタケシには勝てないよな」

だがトレーナーも野生ポケモンも居ない。いや、トレーナーは居たが

クーズ「!!!いいこと、考えた。こい、ピチュー」

出てきてまたダイレクトアタックをする。が、今度はクーズに止められる

クーズ「よし。これで何もできまい」

ピチューを両手でしっかりと掴んでいる。もちろんゴム手袋はしている

クーズ「ピチュー。お前は何処から来たんだ？」

「ピチュ、ピチュー」

クーズ「？」

なんとなく、放した

「ピチュー！ピチュー！」

どうやら上を指しているらしい

クーズ「上から来たって。どこのラピ　タだよ」

「ピチュ！ピチュ！」

怒っているようだ

クーズ「怒られてもな。どうするんだよ」

謎の人物「H A I H A、H A！よう、皆のヒーロー。ワタルだよ」

カイリューに乗ってやってきた

クーズ「・・・（なんか、来た）」

ワタル「いやゝ。クズ君久しぶり。いつもカイリユーがやられてたよ。全く、君は強いな。H A H A、H A！」

クーズ「（ワタルさんがキャラ崩壊してるー！！）えっと、どうしたんですか」

ワタル「空に行きたいのだろ。任せなさい。私が連れてって上げよう」

クーズ「え？なんで？」

問答無用でカイリユーに乗せられ空に向かう

ワタル「クーズ君は知らないかもしれないから話そうか。今、このゲームはバグを起こしている。ゲームの主がゲームを出来ないから、皆、自由に動いているのだよ」

クーズ「（建物も自由に動いてたな）」

ワタル「だから、私がここにいるのだ」

クーズ「へゝ。そうなんですか」

ワタル「では、頑張ってくれたまえ。私は、まだ旅をするからな」

カイリユーに乗って何処かへ行つた

到着したのは、あたり一面、白いタイルみたいのが敷かれている雲

の上だった。柱が何本か立っている

クーズ「これは・・・？」

「よく来たな。クーズよ」

クーズ「誰だ！（脳に直接話しかけられる感じ。ポケモンか）」

「我の名はアルセウス。神だ」

クーズ「アルセウス！！（まさか！ピチューはアルセウスによって作られたポケモンなのか）」

「違う。そのピチューは可愛かったから、さらってきたのだ」

クーズ「心読むな。そして神なのにさらうなよ！（？なんだ、あの首飾り）」

「可愛かった」

クーズ「いや・・・知らないから」

「まあいい。我と戦いに来たのだろ？」

クーズ「目的は、よく分からないが、そうだと思うぜ」

「では、始めるか。そっちはピチューとドジョッチを出すのだな」

クーズ「最初から、そのつもりだ。いけ、ピチュー！ドジョッチ！」

相手は神と言われているポケモン。恐らく、ピチューとドジヨッチ
で倒せる相手じゃないな。だが勝算はある

ものがたりのポケット（後書き）

ツヤガ「あれね。もうアルセウスが出ちゃった」

クーズ「いや。その前にピチューとドジヨッチじゃ倒せないだろ」

ツヤガ「最後に 勝算はある って言ったから多分平気だよ」

クーズ「それならいいけど」

ツヤガ「感想とかテキトーに待ってまゝす」

ものがたりのモラル

クーズ「よし、ピチュー。でんきショック！ドジョッチ。どろばくだん」

二匹の攻撃がアルセウスを襲う

「そんな技喰らわないわ！！」

ハイパーボイスで二人の攻撃を無効化する

クーズ「やっぱり。無理か」

「今度は、こちらから行くぞ！！」

「ドジョ・・・？」

ドジョッチに向けて、あくうせつだんが放たれる。しかし、ヌメヌメしているドジョッチは滑って当たらなかった

クーズ「えー！！ドジョッチ有り得ないだろ。・・・いや、チャンスだ。ピチュー、わるだくみ」

「ピチュー、ピチュー」

「ドジョッチ、ごときに。ならば、はあ！！」

ときのほうこうがドジョッチを狙う。だが同様に避けられる

クーズ「ドジョッチがここまで時間を稼いでくれるとは」

その間にピチューはわるだくみを、やりまくる

「ならば、見せてやろう」

アルセウスの色が緑色に変化する

「喰らえ!!」

クーズ「!!ドジョッチ」

アルセウスが使った技はリーフストーム。水、地面のドジョッチは一撃だろう

クーズ「とどけー!!」

走ってドジョッチを助けようとする。だが間に合いそうにない

クーズ「（くそ。・・・!?!）」

突然、足がバグを起こす。そして戻った時には

クーズ「ランニングシューズ!!よし、これなら」

靴の力を借り早くなったクーズはドジョッチを捕まえる

「ドジョー!」

しかし、滑って手から飛び出る。そしてクーズがいる場所にアルセ

ウスのリーフストームが炸裂した

「よく、死ななかったな。クーズ」

クーズ「危ないな！死ぬかと思ったぜ」

驚異の身体力でリーフストームを避けた。だが服は切れている所が多々ある

クーズ「（緑になった瞬間リーフストームか。恐らくタイプを変えたな。確かアルセウスのタイプを変えるにはプレートが必要なはず）」

「ピチュ！ピチュ！」

わるだくみで特攻が最高レベルになった

「ふむ。ならば倒すのみ！」

色が黄土色になる

クーズ「やばい。あれは地面タイプ。ピチュー。避ける！」

だいちのちからがピチューを襲う

クーズ「ドジョッチ。マグニチュード！！」

「ドジョー！」

クーズ「（これでアルセウスの攻撃を粉碎するしかない。あとはマ

グニチュード次第だ」

マグニチュード

10

クーズ「よし、いけー!!」

アルセウスのだいちのちからと、マグニチュード10がぶつかる。
だがアルセウスのだいちのちからは防げなかった

クーズ「ピチュー!!」

だいちのちからで吹っ飛ばされる。クーズはピチューをナイスキャ
ッチした

クーズ「ピチュー!大丈夫か?」

「ピチュ・・・」

弱っているが、まだひんしではない

「!?!いくらドジョッチのマグニチュードで弱くなったといえ、ピ
チューが耐えただと」

クーズ「・・・はっ!そうか。アルセウス!お前がだいちのちから
の前に使った技を思い出せ」

「我が使った技。そうか、リーフストームか」

リーフストームは強力な技だが使うと反動で特攻が下がる

クーズ「ピチュー、頑張れ。お前が居ないと、この勝負勝てない！」

「ピチューー!!」

空気がだるうが元気を出した

「面白い。ならば本気を見せてやろう!!」

空気が変わる。今まで封じていた力が解放される

「一撃で終わらせよう。はあああ!!」

クーズ「さばきのつぶてか。ピチュー、さばきのつぶてに向かって、でんじは」

「ピチューー!!」

さばきのつぶてに電気が混じる

「私の攻撃を強くして、どうするのだ」

クーズ「これはドジョッチなどのヌメヌメの奴を確実に捕まえられる手袋！」

どこから取り出したか知らないが手袋をした

クーズ「ピチュー。ドジョッチ。いくぞ」

ピチューを抱え、ドジョッチを掴む。そしつ、さばきのつぶてをギリギリまで近付けてジャンプをして上に行った

クーズ「よし。ピチュー。俺たちに、でんじはだ」

「ピチュー？」

クーズ「大丈夫だ。俺を信じろ」

自分たちにでんじは、がかけられる

「なるほど。私の攻撃にしたでんじはは、今やったでんじはと違う電極か」

クーズ「そうだぜ。これで俺は浮くー!!」

反発力により高く浮いた

クーズ「よし、いっけー!!」

ハイパーボールをアルセウスに投げる。その瞬間

クーズ「ピチュー。フルパワーのでんきショックー!ドジョッチ、みずてっぽう!!」

アルセウスはハイパーボールを避けた、すぐでありピチュー達の攻撃に反応が遅れた

「だが、まだ甘いな」

アルセウスの色がまた緑になる

クーズ「草タイプ。くそ。でんきも水も効きにくい（あのタイプ変化を止めないと）」

二匹の技を合わせた技はあまり喰らわなかった

クーズ「だったら。ピチュー、でんじは。ドジョッチ、みずあそび」

落下しながらだが命令をする。みずあそびで範囲が広がったでんじはがアルセウスに当たる

「ぬうう」

クーズ「（あのタイプ変化はプレートによるもの。だったら何処かにプレートを持ってるはず）」

「ドジョー！」

ドジョッチの尻尾がクーズの首に当たる

クーズ「あれかー！」

首飾りをアルセウスはしていたが、そこにプレートがあつた

クーズ「（・・・俺が取りに行くしかないな）ドジョッチ、ピチュー。俺を背中から叩けー！」

「ドジョー!」「ピチュー!」

二匹の尻尾に思いっきり叩かれる。そして、加速してアルセウスに近付く

「でんじは、じときー!」

アルセウスは力で、でんじはを無理矢理、解除した

クーズ「もらったー!」

アルセウスの首飾りを掴む。落下したスピードがあるので首飾りは簡単に外れた

「!? 首飾りを」

クーズ「よし。ピチュー! ドジョッチ! でんきショック、みずのはどう」

「ドジョー!」

「ピチューー!」

二匹の技が同時に放たれみずのはどうの輪にでんきショックが混ざる

「ぐわあああ」

わるだくみでフルパワーのでんきショックと、みずのはどう、がアルセウスに直撃する。そしてアルセウスは倒れる

ドーン!!

クーズ「いつてー！！！！」

かなりの距離から落ちたが主人公の補正で平気だった

クーズ「やべ！ピチュー！ドジョッチ」

二匹は、まだ落下している。だが落下地点はクーズの所だ

クーズ「嫌な。予感しか！！」

ピチューとドジョッチがクーズに体当たりをする

「ピチュ！」

ピチューは元気そうだ。ドジョッチは、みずのはどう、を使い干からびそうだ

「よく、我の分身を倒したな」

クーズ「へ？分身」

立ち上がったクーズの目の前にアルセウスがいた

クーズ「わあ！びっくりした。それより分身って」

「ああ、そこで寝てる奴は我の分身だ。流石に本物の我と戦ったら勝ち目はないからな」

クーズ「はあゝ。なんだよ。本物に勝ったと思ったのに」

「まあ、あれだ。これは【神々の遊び】だ」

神々の遊びと言ったところは、いつのまにか復活したアルセウス（分身）とタイミングを合わせて演技しながら言った

クーズ「・・・そうか。あ！今、気付いたが俺はどうやって戻るんだ？」

「我の力を使えば簡単だ。その前にポケモンを回復させよう」

アルセウス戦で傷付いた二匹が回復していく。（ピチューは傷が治り、ドジョッチは潤いが戻る）

「クーズ。これからお前には様々な困難があるだろう。だが負けるな。全てが終わった時に後悔しないようにな」

クーズ「え？ちょ、まっ」

「神は乗り越えられる試練しか与えないか・・・。我ながら良いことを思いついたな」

くニビシテイ

クーズ「あいつら話聞かねえな。・・・よし、ジム戦に行くか」

ものがたりのモラル（後書き）

ツヤガ「特攻とか下がるのは関係してきますね。もちろん上がるのも」

クーズ「ドジョッチ。ありがとな。お前のヌメヌメが無かったら負けてたぜ」

ボールの上から撫でる

「ピチュー！！」

勝手にボールから出てクーズの腹に体当たりする

クーズ「いって・・・なんだよ。ピチュー」

ツヤガ「（やきもちかな？）」

「ピッ！」

拗ねたピチューだった

ツヤガ「気にしちや駄目なんだろうけど、ヌメヌメで特殊攻撃って避けられないよね。まあ、気にしちや駄目なんだろうけどさ」

クーズ「最初から気にしちや駄目ってええよ」

ツヤガ「ピチュー、でんきショック！」

「ピチューー!!」

クーズ「ピチュー、お前・・・」

バタッ

ものがたりの長寿（前書き）

ツヤガ「あゝ、暑い。夏は暑いよ。今回の話に燃えるって書いてあります。夏がさらに暑く感じるかもしれないね」（ないか）「

ものがたりの長寿

クーズ「・・・またポケセンと入れ代わってるのか」

トキワと同じでジムとポケセンが入れ代わっている

クーズ「！そうだ。博物館行こう」

〈博物館〉

受付「入場するには一人、500円払ってください」

クーズ「（なんで、ぼうそうぞくが受付なんだよ。しかも地味に高くなってるし）はい。500円です」

受付「あゝ、ポケモン一体につき追加で100円です」

クーズ「流石にそれは・・・」

受付「んだと！！やんのか、ゴラァ」

クーズ「・・・ポケモン勝負ならやりますよ」

受付「ほゝ、小僧、この前世ポケモンチャンピオンと言われる俺とやるのか？」

クーズ「（前世なんだ）いいですよ。強い相手の方が燃えます」

〈移動〉

審判「では、両者位置に！」

クーズ「（なんでタケシが審判なんだよ。ジムは、どうした！）」

タケシ「ルールはそれぞれ一体ずつの一本勝負。では、始め！」

受付「いけ！ホウオウ！」

クーズ「ピチュー、お前に決めた！」

「ホーホー」「ピチュー！」

受付はホウオウというニックネームのホーホーを出した（一度は考えるネタだよね）

受付「こっちからいくぜ！！。ホウオウ、たいあたり！」

前世ポケモンチャンピオンと言われてるだけ、かなりのスピードだ

クーズ「ピチュー、避けてから、でんきショック！」

「ピチュー！」

ホーホーのたいあたりをジャンプしてかわし、でんきショックを放つ

受付「甘いな。ホウオウ、とっしん！」

たいあたりの時より速い動きでピチューのでんきショックを避け、落下してきたピチューを攻撃する。空中で何も出来ず喰らう

クーズ「ピチュー！」

受付「カスだな。・・・！？」

ホーホーが麻痺している

クーズ「そうか、ピチューの特性、せいでんきか！。よし、ピチュー今だ。でんきショック！」

ホーホーは麻痺で動けない

受付「ハハハ、まだだ。ハウオウ、サイコシフト！」

クーズ「なに！」

サイコシフトは自分の状態変化を相手に写す攻撃である（特性のシンクロと一緒に）

「ピッ、チューー！！」

でんきタイプのピチューは麻痺くらいなら平気だった。そしてホーホーに攻撃が当たる

受付「！？ならば。ハウオウ、ねんりき」

「ホオーーー！！」

超能力によりピチューが浮き何度か地面に叩きつけられる

クーズ「（このままじゃ、ゴリ押しされる。どうにか・・・）」

タケシ「クーズ君。元ジムリーダーから言つことがある」

クーズ「え？」

タケシ「ポケモンに不可能はない。いくらだって強くなれる。可能性は無限大だ」

クーズ「・・・。ピチュー！お前ならできる。十万ボルト！！」

「ピチューー！！」

受付「ホウオウ。負けるな！エアスラッシュ！」

今、二匹の技がぶつかり合い爆発を起こす

クーズ「ピチューー！」

受付「ホウオウ！」

煙が全て引いた時

タケシ「勝者、クーズ」

クーズ「よっしゃあ！ピチュー。うげふ」

抱きつこうとしたが蹴られた

受付「ちつ。しょうがない。バトルに負けたからポケモンの代金は無しだ」

謎の人物「コラア！バイト！なにをサボってるんだ」

受付「やべ。見つかった」

博物館の係の人「すいません。このバイトが、なにか、やらかしたようで」

クーズ「いえいえ。こちらバトル出来たのでいいですよ」

博係「なに！そんなことしてたのか！！」

受付「まあ、いいじゃねえかよ。気にすんな」

博係「バイトのくせにうるさい！本当にすいません。御礼と言っ
ては、なんですが、これを」

クーズ「これは・・・」

みずみず玉を貰った

博係「これは水タイプに持たせると喜びます」

クーズ「（喜ぶ・・・）」

博係「では」

バイトの受付と一緒に博物館に帰った

クーズ「あ！タケシさん」

タケシ「ん？なんだい」

クーズ「さっき、元ジムリーダーって」

タケシ「ああ、それが。これは二時間前に起こった出来事だ」

タケシ「挑戦者か？」

謎の人物「いや、侵略者だな」

タケシ「！？」

タケシ「気付いたらジムの外さ」

クーズ「（侵略者か）じゃあ今からジムに行くから一緒に行きますか？」

タケシ「そうだな。さっきは何も出来なかったから今度は、あいつらみたいに追い出してやるか」

クーズ「あ！そうだ。ドジョッチ」

ボールからドジョッチが出てくる、もちろん地面なので時間が経てば死ぬだろう

クーズ「ドジョッチ。みずみず玉だぞ」

ドジョッチに持たせる。すると潤いが出てきた

「ドジョー!!」

クーズ「お！元気でたでた。これでドジョッチは地面でも平気だな」

タケシ「じゃあ、ポケセン寄ってから行くか」

ものがたりの長寿（後書き）

クーズ「ピチュー。なんで抱きついちゃ駄目なんだよ」

「ピッ、ピチュー！」

クーズ「？分かん」

ツヤガ「ピチュー、こっちにおいで」

「ピチュー！！」

ツヤガに抱きつく

クーズ「（あれか、ピチューはオスなのか）」

ものがたりの軸

クーズ「（ポケセンがジムだと迫力ないな）」

そんなことは気にせずジムに入る

謎の人物「あれ〜？今、ここは私達、【デフェクト団】の物ですよ。勝手に入って来られては困ります」

タケシ「何を言っている！！ジムリーダーの交換は正式な物が」

謎の人物「黙れ。いんだよ、侵略したから」

クーズ「だったら、侵略し返せばいいんだな？」

謎の人物「へ〜。お前、俺に勝てると思ってるの？」

クーズ「やってみなきゃ。分かんないだろ？」

謎の人物「ハハハ。いいだろう。俺の名前はグストだ」

クーズ「俺はクーズだ」

タケシ「では、両者位置に！」

今、二人の戦いが始まる。果たして結果は、どうなるんだ

グスト「いけ、デンリュウ！」

クーズ「ドジョッチ！お前に決めた」

グスト「（水、地面か。相性悪いな。だが）デンリュウ、シグナルビーム」

クーズ「ドジョッチ、避ける！」

ヌメヌメ補正で地面を滑りながら移動する

グスト「シグナルビームを右、左、真ん中の順に撃て！」

右に撃ちドジョッチが止まり左に行こうとする。そこにまたシグナルビームが来てドジョッチは混乱して動きが止まる

クーズ「くっ。ドジョッチ。シグナルビームに、みずのはどう！」

だがドジョッチが放つ前にシグナルビームが当たる

グスト「まだまだ！デンリュウ、ほのうのパンチ！」

ドジョッチにデンリュウが近付く

クーズ「ドジョッチ、マグニチュードで応戦だ！」

「ドジョ！」

グスト「ジャンプでかわせ！」

「デン！」

ジャンプでかわす

クーズ「よし、今だ。ドジョッチ、みずてっぽう！」

クーズは避けることを計算に動いていた

グスト「ククク・・・ハハハ！！デンリュウ、ドレインパンチ！！」

クーズ「なに！！」

またグストも裏の裏を読んでいた。みずてっぽうで火を消された逆の腕でドレインパンチを使う

「ドジョー！！」

クーズ「ドジョッチ！！」

タケシ「ドジョッチ、戦闘不能」

クーズ「くそ。ドジョッチ、ありがとな」

ドジョッチをボールに戻す

クーズ「次は、こいつだ。こい、ピチュー！！」

「ピチュー！！」

グスト「はあ？ドジョッチとか出してる時点でおかしいと思ったが進化させとけよ」

クーズ「うるせえ。まだ始めて数時間しか経ってないから、しょうがないだろ」

グスト「まあ、この程度なら即行で倒せるな。デンリユウ、シグナルビーム！」

クーズ「避けてから、でんきショック」

シグナルビームを避け、デンリユウにでんきショックが当たるが、あまり効いていない

グスト「シヨボいな。デンリユウ、パワージェム！」

無数の岩がピチューに向かって飛んでくる

クーズ「パワージェムと自分に、でんじはー！」

アルセウス戦で身に付いた電気の力を利用した技である

グスト「だったらデンリユウ、ほのうのパンチ！」

クーズ「（くっ、ピチューじゃ有利な技がない）ピチュー！十万ボルト」

グスト「待ってたぜ！デンリユウ、じゅうでん！」

クーズ「！？」

デンリユウは、ほのうのパンチを直ぐ止め、ピチューの十万ボルト

を吸収した

グスト「よし。デンリユウ、かみなりパンチ！」

「ピチューー!!」

グスト「（このままじゃ、負ける）」

グスト「終わりにするか。デンリユウ、かみなり!!」

「デーン!!」

クーズ「ピチューー!!」

かみなりパンチで吹っ飛ばされたばかりで反応できない。かみなりはピチューに当たり煙を大量に出した

グスト「ハハハ、俺の勝ちだな」

だが明らかにおかしい。何か音がしている

クーズ「?なんだ、このパチパチする音は」

煙が少し引いたところで正体が分かる

グスト「電気が!？」

そこには、電気を抑えきれないピチューがいた

クーズ「（なんだ、この感じ）ピチュー、十万ボルト!!」

「ピッチューー！！！」

グスト「デンリユウ、じゅうでん！」

「デン！」

じゅうでんでピチューの十万ボルトは吸収されるが、ピチューは止まらない

グスト「（くっ、このままだと）」

クーズ「よし、一気に畳み掛ける！」

さらにピチューの十万ボルトの威力が上がる。デンリユウは全て吸収できず十万ボルトを喰らう

タケシ「デンリユウ。戦闘不能！」

グスト「（あの威力。なかなか面白いな）審判、俺の手持ちは、もういないから俺の負けだ」

クーズ「おい、まで」

だが無視してジムを去っていった

タケシ「あのグストって奴、まだボールを持っていたな」

クーズ「え？じゃあ、さっきのは」

タケシ「何かの理由で嘘をついたんだろう」

クーズ「あ、ピチュー」

ピチューは倒れていた

タケシ「！酷い熱だ。早くポケセンに連れていこう」

ものがたりの軸（後書き）

ツヤガ「毎回、みんな覚醒していくよ。これじゃ相手が可哀想じやん」

クーズ「じゃあ俺の手持ち増やす、しかないでしょ」

ツヤガ「それがね。ポケモンを何にしようか迷ってるんだよ。全員出れるから選択肢が多くて」

クーズ「カッコいいポケモンを希望!!」

ツヤガ「もちろん。あまり使われないポケモンを使うよ」

クーズ「（それってカッコ良くも強くもないよな）」

ものがたりの歓喜

ジョーイ「今は安定していますけど、このピチューは、どうしたんですか？」

ピチューをポケセンに連れていきジョーイさんに診てもらった

クーズ「実はカクカクシカジカなんです」

ジョーイ「・・・なるほど。一度ピチューの精密検査をしてみませんか？何か分かるかもしれません」

クーズ「そうですね。よろしくお願いします」

タケシ「クーズ君。俺はジム関係で色々あるから帰るね」

クーズ「あ！色々ありがとうございました」

タケシ「なに、大したことないよ。じゃあね」

クーズ「（このバグゲームでも良い人いるんだな）」

く敵陣く

グスト「だから謝ってるだろ」

謎の人物A「謝って済む問題じゃない」

謎の人物B「キャハハ。流石、問題児ね」

グスト「んだとー!!」

謎の人物C「あわわ。落ち着いて下さい」

グスト「ちつ。覚えておけよ、752」

752「ええ、いいわよ。貴方がカスだってことを覚えるわ」

グスト「やつぱ、今から殺すー!!」

謎の人物A「二人とも止めろ!あの方に報告するぞ」

二人とも急に黙る

謎の人物A「で、グストは何か分かったのか?」

グスト「ああ?・・・そうだな。分からないと言っておくさ」

謎の人物A「・・・まあいい。今度から自重して行動しろ」

グスト「へいへい」

くポケセンく

クーズ「ありがとうございました」

ピチューの精密検査をしたが結局何も分からなかった(健康体だっ

た)

クーズ「よし、次はハナダシティのジムだな」

〈三番道路〉

クーズ「ピチュー、十万ボルト!!」

「ピチュー!!」

ポケトレ(女)「私の可愛い。ミズゴロウが!?!」

クーズ「(原作と、かなりポケモンが違って楽しいな)」

無事にお月見山の手前のポケセン着いた

クーズ「よし、トレーナーがいたからレベル上げも、そこそこ出来たな」

だがポケセンの前に人影ならぬポケ影がある

クーズ「あのシルエットは?」

「・・・カモ」

クールなイメージのカモネギである

クーズ「(カモネギさんだー!!嘘だろ。あのカモネギさんが!!)」

そこまで褒めることもないだろう

クーズ「よし。早速ゲットだな。お前に決めたピチュー!!」

「ピチュー!」

出てきた瞬間カモネギが動く

クーズ「!?ピチュー。避ける」

だがカモネギの動きが読めず、れんぞくぎり、を喰らう

クーズ「でた!カモネギさんの、こうそくいどう、からの、れんぞくぎり、コンボだ!」

どこかのカードゲームのキャラの台詞をパクっているクズを無視してピチューは、でんじは、を放つ

「・・・カモ」

しかし、こうそくいどう、で早くなったカモネギに攻撃が、なかなか当たらない

「ピチュ」

そしてピチューは怒った

「ピチュー!!」

まずクズを焼き焦げにする

クーズ「ピチュー・・・何故・・・」

カモネギもピチューの殺気を感じたのか構える（ネギを鞘に収めた感じ）

ピチューも対抗して構える（ほっぺを詰まんでいつでも放電できるようにする）

二人とも構えて動かない。だが沈黙の時間に終止符が打たれる

風が吹いた

ピチューとカモネギが同時に動く

「ピチュー！」

「カモ！」

ピチューの十万ボルト、カモネギの、いあいぎり

先に体が地面についたのは・・・

ピチューだった

だがカモネギもその後、直ぐに倒れた

クーズ「！？カモネギ捕まえるチャンスだ！」

何故か復活したクーズがハイパーボールをカモネギに投げる

ポン ポン ポン

ポポポポーン

クーズ「よっしゃ。カモネギGETだぜ!!」

何か変な音がしたが気のせいだろう

クーズ「今、気付いたけどポケモン図鑑がないな」

何故か、カモネギを捕まえて思い出した

クーズ「じゃあ、早速」

「・・・カモ」

クーズ「よろしくな。カモネギ」

「・・・ピチュー!!」

倒れてから放置されていたピチューが怒りクーズにまた十万ボルトを喰らわせる

クーズ「ピチュー。少しは、なつけ・・・グタ」

「・・・カモ」

「ピチュー」

ものがたりの歓喜（後書き）

ツヤガ「短いかもしれなかったね」

クーズ「まあ、気にしなきゃ問題ない」

ツヤガ「カモネギが新しく仲間になりましたね。これで苦手な草タイプを克服した」

クーズ「しかし、またネタポケモンだな」

ツヤガ「色々面白い技を覚えるから小説書きやすいのだよ」

クーズ「そうですか」

ものがたりの勝利者（前書き）

ツヤガ「言うの遅かったです。が、キャラ崩壊注意です!!」

ものがたりの勝利者

クーズ「お月見山か。ズバットはピチューに任せると。イシツプテとかはドジョッチで、ごり押しするか」

お月見山に入る前に作戦を考える。だが原作と違えば何の意味もない

クーズ「よし持ち物も大丈夫だから行くか」

お月見山を抜けてハナダシティに行くと少しの間ニビシティやマサラタウンに行けなくなる

くお月見山の中く

クーズ「変わった所は特にないな」

だが戦闘に入る

クーズ「!？」

相手はクチートだった。見た目は可愛いが後ろの口みたいな物は噛まれるので危険である

クーズ「よし、ドジョッチ。stand stage!」

台詞を変えてみた。・・・微妙である

クーズ「一気に終わらせる！マグニチュード」

マグニチュード7

「ドジョー！」

「チート！」

てっぺきをしてマグニチュードを防ぐ。鳴き声は・・・

「クチクチ」

クチートは、うそなきを使った。これで大体の野郎共は落とせる。
しかし今回は相手が悪かった

クーズ「ドジョッチ！なんかチャンスだ。もう一回マグニチュード
！」

マグニチュード9

「ドジョー！！」

二人とも（一人と一匹）は乙女の心なんて何にも分からない

「クチー」

マグニチュードを、もろに喰らい戦闘不能になった

クーズ「よし、どんどん進むぞ」

順調にお月見山を攻略していく。ポケモンは主に、ズバット、クチート、イワーク、ノコッチなどだった

クーズ「しかし手抜きだな」

お月見山に人は居なかったが化石の所にさえ誰も居ない

謎の人物「待て!!」

クーズ「？」

謎の人物「化石は全て僕のものだ!! 誰にも渡さない!! 渡さないなら倒すのみ!!」

クーズ「(キャラ崩壊してるダイゴさん、きたー!!)」

ダイゴ「(石、石、石石石、石、石)」

クーズ「(なんか小声で言ってるよ。分かんない。怖いよ)」

ダイゴ「貰ったー!!」

クーズの隣にある化石達を狙って猛ダッシュ

ダイゴ「ウゲフー!!」

だが石に躓き大胆に転ける

ダイゴ「こんなはずじゃ。・・・こんなはずじゃー!!」

なんか地面を叩きながら悔し涙を流している

クーズ「……」

クーズは啞然としている

（；。。）　こんな感じ

ダイゴ「すまない。見苦しい所を見せてしまった。私はダイゴ。どつかの地方のチャンピオンだった人さ」

クーズ「俺はクーズです。チャンピオンって凄いですね」

ダイゴ「いや、大したことないよ。鋼タイプでガチガチにすれば余裕さ」

クーズ「……そうですか」

ダイゴ「君は、この化石の所有者かい？」

クーズ「えっと……多分そうです」

ダイゴ「なるほど。ここは平等にポケモン勝負と、いこうではないか！」

クーズ「（この化石は俺のなに！？）」

ダイゴ「さあ、一対壹でいこう」

クーズ「（いやチャンピオンの实力を見たいから、いいか）そのかわり勝ったら好きな方を選ぶでいいですか？」

ダイゴ「・・・フツ。いいだろう」

クーズ「よし、じゃあカモネギ。stand stage!」

「・・・カモ」

ダイゴ「（カモネギか。メタグロスで余裕だな）」

説明はフラグ

ダイゴ「いけ。メタグロス!!」

「ノコ」

ノコッチが出てきた

ダイゴ「しまった!さっき捕まえたノコッチが!!」

まさに大誤算!!

クーズ「これが言いたいだけだろ。カモネギ、こうそくいどう、からの、れんぞくぎり」

ピチューに攻撃を当てたコンボを使う

ダイゴ「（いや、元チャンピオンの僕なら補正とかが）」

無論、ない。ノコッチは攻撃を受け続ける。れんぞくぎりは連続で当たれば当たるほど威力が上がる

クーズ「よし。終わりだ！とどめのれんぞくぎり！！」

カモネギの一撃がノコツチを襲う

ダイゴ「フツ。まだまだ甘いよ。クーズ君」

クーズ「！？」

ダイゴ「ノコツチ！いかり！！」

「ノコーー！！」

いかりは攻撃を受ける度に威力が上がる。れんぞくぎりで何回も攻撃を受けていたノコツチ

「カモー」

カモネギは壁まで一撃で吹っ飛ばされる

ダイゴ「これが元チャンピオンの実力さ」

クーズ「（あのカモネギを一撃で・・・）流石ですね」

カモネギをボールにしまう

ダイゴ「では、約束通り・・・2つとも貰っていくぜー！！」

クーズ「！？あ、ちょ」

ダイゴ「ハハハ。奪えばいんだよ。奪えば！」

かなりキャラがイカれてる。だが神様は、しっかり見ている

ダイゴ「よしメタグロスで、この壁を壊して逃げるぞ。いけ、メタグロス！」

「ノコ」

ダイゴ「またお前か！！！」

走っていたダイゴは急に止まれずノコツチにぶつかり転んだ

ダイゴ「・・・僕が悪いんじゃない。化石が悪いんだー！！」

クーズ「・・・あの、もういいんで、一つくださいよ」

ダイゴ「え？いいの？」

目がキラキラしている

クーズ「・・・もう、いいです」

ダイゴ「キャー。やったー。私、化石貰ったわ。ラッキー！！」

クーズ「（うぜー！！）」

ダイゴ「では、僕はこちらで」

クーズは、こうらのかせき、を返して貰った

ダイゴ「僕はまだこの山を調べるからね。じゃあね」

クーズ「あゝ、はい。また会えるといいですね」

厄介な奴と別れられて良かったと思ったクーズだった

ものがたりの勝利者（後書き）

ツヤガ「ダイゴさんは、もう流石しか言い様がないね」

クーズ「色んな所でキャラ崩壊してるもんな」

ツヤガ「皆さんはサブタイトルで ものがたりの〜〜 が気になっ
ていますか？」

クーズ「ああ。今回は ものがたりの勝利者だったな」

ツヤガ「実はあれ・・・」

クーズ「（なにがあるんだ？）」

緊迫した空気が流れる

ツヤガ「何も意味が無いんです」

クーズ「なん・・・だと・・・」

ものがたりの付和雷同

クーズ「まずはゴールデンブリッジを閉鎖するか」

要するにゴールデンブリッジを攻略するという意味である

トレーナー（男）「俺の闘志、ファイヤーが！」

クーズ「なんでファイヤーがいるんだよ」

理解不能なポケモンを一人一人持っていた

クーズ「そう言えばライバルのグリーンが出てこないな」

最初のグリーンさえ無視していた。いや逃げた

クーズ「よし。やっと来たな」

マサキの家に着いた

ポケモン？「！？助けてくれや。わいを助けてくれ」

クーズ「任せな。ここでマサキを助けてって！？」

通常はコラッタの見た目だが、ベトベターの見た目になっていた

クーズ「何これ、グロい。年齢対象無制限のこの小説はきついよ」

そして書けないので素早く装置に入れてマサキを直した

マサキ「いやゝ、ありがとな」

クーズ「・・・あなたは!？」

見た目がワタルだった

ワタル? 「いやいや、すまんゝ。最近整形して、ワタルの顔にしてみうたんや」

クーズ「(なんでしたっただなんだ?) そうですかー。じゃあ助けたんでチケットを」

マサキ「チケットはジムリーダーのカスミに取られたんや」

クーズ「へ?」

マサキ「まあ、あれだ。可愛い女性には、はかいこうせん、は撃てないよ。みたいな」

クーズ「(船行けないな。カスミから取り返すしかない) じゃあ、また」

マサキ「あ! ちよ。まってなゝ」

ワタルの真似をしたがるマサキを無視してクーズはジムに急いだ

クーズ「ここがジムか?」

落書きばかりされている（夜露死苦みたいな感じ）

クーズ「嫌な。予感しかないが、行くしかない」

暴走族A「姉御、流石です！！水のプリンセスと言われ」

姉御？「ああ？違うでしょ。世界のプリンセスでしょ！！」

足で暴走族Aの背中をグリグリする

暴走族A「はあ、はあ。俺、幸せです」

そこには暴走族数人とカスミがいた

暴走族B「ん？誰だテメー！！」

クーズ「えつと・・・ジムの挑戦者です」

暴走族C「このカスミ様と戦いたいならリアルファイトで俺達を倒すんだな」

そして暴走族とカスミは爆笑する

クーズ「（なんだこいつら・・・）」

カスミ「まあ冗談はここまでよ。さあ来なさい！お姉さんがボコボコにして、あ・げ・る」

クーズ「ピチュー。今すぐ殺れ！！」

「ピチュー！」

カスミ「あらあら。怖い、怖い。ヒトデマン、美しく決めるわよ」

「ヘアッ！」

ステージは水がない普通のステージである

クーズ「ピチュー。十万ボルト！」

カスミ「（十万ボルト。ピチューのくせにやるわね）ヒトデマン。避けて、あやしいひかり」

「ヘアッ！」

ヒトデマンはジャンプしてよけピチューにあやしいひかりをする

クーズ「くつ、混乱か。ピチュー、でんじは」

「ピチュー？」

でんじはがクーズに向かって放たれる

カスミ「ハハハ。いい様ね。ヒトデマン、ハイドロポンプ！」

クーズ「ちつ、ピチュー。避ける！」

「ピチュー？」

クーズに突進してきた。だがハイドロポンプは避けた

クーズ「うげふ」

カスミ「フフ、終わりよ。これは避けられないでしょ？なみのり！」

どこからか波が来た

クーズ「ちくしょ。ピチュー、戻れ。カモネギ、そらをとぶ」

「・・・カモ」

クーズの手を掴みながら飛ぶ

「ヘアッ」

だが波で来たヒトデマンにクーズが当たった

カスミ「ちょっと！トレーナーがポケモンを攻撃しないでよ」

暴走族A「そうだ。テメー、殺されてえのか！」

クーズ「ヒトデマンが当たってきたんだろ！」

何故かポケモン勝負ではなく口喧嘩をしている

クーズ「カモネギ、つばめがえし！」

「カモ！」

素早い動きでヒトデマンに攻撃が当たる

カスミ「！！ヒトデマンが」

審判「ヒトデマン、戦闘不能」

クーズ「（いつからいた。審判よ）」

カモネギに落とされ綺麗に着地した

クーズ「よし、このままいけば」

カスミ「行きなさい。ドククラゲ！」

「ドク」

基本、鳴き声が分らないと最初の二文字を使う

クーズ「！！ドククラゲ。暴走族になると毒が必要か」

カスミ「ドククラゲ。あやしいひかり！」

クーズ「二度も同じ手は効かないぜ。カモネギ、こっすくいどつ」

「・・・カモ」

素早い動きでドククラゲの攻撃を全て避ける

カスミ「なかなか、やるわね。ドククラゲ、からみつく！」

ドククラゲの長い触手が何本も来てカモネギを捕まえた

クーズ「ちっ。カモネギ脱出しろ」

だがカモネギの力ではドククラゲからは逃れられない

クーズ「（カモネギを擬人化したら薄い本が作れそうだな）」

カスミ「ドククラゲ！しぼりとる」

ドククラゲの触手からカモネギの力が、しぼりとられていく

クーズ「（まずい！どうにかしないと）」

カスミ「このまま終わりね」

余裕なカスミ様を暴走族の部下達は誉める

クーズ「いや、まだだ。カモネギ！エアスラッシュ」

切るまでは、いかないがダメージを与えて脱出した

クーズ「かなり体力を持っていけたな」

カスミ「ドククラゲ！ようかいえき」

クーズ「カモネギ、避けてから、つばめがえし！」

「・・・カモー！！」

力を振り絞りドククラゲの攻撃を避けて、つばめがえし、を当てる

カスミ「なかなかやるわね」

審判「ドククラゲ、戦闘不能」

カスミ「じゃあ、私の最強のパートナーを紹介するわ。スターミー！」

「ヘアッ！」

カスミ「スターミー。ハイドロポンプ！」

クーズ「カモネギ。避ける！」

だがヒトデマンとは比にならないほど早く、避けられなかった

審判「カモネギ、戦闘不能」

クーズ「（なんだあれ。勝てるのかよ）」

ものがたりの付和雷同（後書き）

ツヤガ「果たしてライバルはいつ出てくるのだろうか」

クーズ「まあグリーンは強いから出なくていいよ」

ツヤガ「では書くことないので ノシ」

ものがたりのサイレント

クーズ「こうなったら。いけ！ドジョッチ」

「ドジョ」

カスミ「あらら。水、地面って相性、微妙ね。ピチューは出さないのかしら？」

クーズ「いや、お前のスターミーはドジョッチで充分だぜ」

カスミ「なめられたものね。スターミー、スピードスター！」

ゲーム中では必中技である

クーズ「ドジョッチ！みずのはどう」

「ドジョ」

スピードスターとぶつかるがドジョッチの方が強かった

カスミ「フッフ。スターミーに水をくれてありがとう」

威力が弱まっておりますスターミーは水タイプなので喰らわなかった

クーズ「ちっ、ドジョッチ。マグニチュード！」

マグニチュード8の攻撃がスターミーを襲う

カスミ「スターミー！避けて、ハイドロポンプ」

ハイドロポンプがドジョッチ目掛けて飛んできた

クーズ「よっしゃ。ドジョッチ！ハイドロポンプに、たきのぼり」

スターミーのハイドロポンプを登る。ドジョッチが鯉になった瞬間だった

カスミ「！？」

クーズ「よしいっけー！！」

たきのぼりがスターミーに当たる。そして下に落ちる

クーズ「まだだ。ドジョッチ、アクアテール！！」

「ドジョー！」

落ちたスターミーに空中からの落下スピードが付いたアクアテールがスターミーを襲う

カスミ「甘いわね。スターミー、サイコキネシス！！」

「ヘアッ！」

ドジョッチの体が超能力により浮いた

クーズ「（やばいな。どうするか）」

と、その時

「ピチュー!!」

勝手にボールから出てきたピチューが何かを伝えようとしている

クーズ「・・・任せろ。ピチュー!」

よく分らないがピチューの頭を撫でる

クーズ「(この状況・・・)」

そしてクーズは答えを出す

カスミ「スターミー。ドジョッチを叩き落としなさい!」

クーズ「やらせないぜ!ドジョッチ。みずあそび」

超能力で、みずあそび、の水が浮いた

カスミ「何がしたいか知らないけど終わりよ!やりなさい、スターミー!」

「ヘアッ!」

ドジョッチが叩き落とされ煙が舞う

審判「ドジョッチ。戦闘不能」

クーズ「よし。ピチュー、終わらせてこい!」

ドジョッチをしまいピチューを出す

カスミ「フフフ。スターミー！あやしいひかり」

クーズ「ピチュー！十万ボルト」

しかし、あやしいひかりが先に当たる

カスミ「これでもう十万ボルトは当たらないわ！そしてポケモン交換も出来ない。私の勝ちね」

暴走族達がまたカスミを誉める

クーズ「それはどうかな？」

ピチューの放った十万ボルトは、サイコネシスで浮いている、みずあそび、に当たる

カスミ「まさか！？」

十万ボルトは拡散した

クーズ「やべ！トレーナーを計算に入れてなかった！！」

クーズはもちろんカスミや暴走族達も十万ボルトを喰らう

審判「スターミー。戦闘不能」

クーズ「なんで・・・審判は・・・無傷・・・」

バタッ

倒れたナチヤは最後の力を振り絞り、審判、と書いた

そして時間が過ぎ

謎の人物「H A ～ H A H A ! ワタル。華麗に参上！」

ジムの壁を突き破りカイリユーと共に入ってきた

ワタル「ん？そうか。私はマサキとかいう奴に会いに来たのか」

周りを見渡す

ワタル「ふむふむ。さっきの壁を壊したからかな」

審判は帰っていた。他は気絶している

ワタル「！！クーズ君じゃないか。・・・あれ？クズだっけか、まあいい」

ピチューと一緒に寝てるクーズを起こす

クーズ「んゝ・・・！？ワタルさん！」

ワタル「やあ。お目覚めかい？」

クーズ「・・・本物か」

ワタル「まさかマサキのことを知ってるのか？」

クーズ「えーと、はい。なんか整形してワタルさんの顔になってました」

ワタル「噂は本当のようだな。今すぐ殺りに行くか」

謎の人物「おっと。まちなはれ」

マントを靡かせて登場したマサキがきた

マサキ「別に行かんと、わいはここに居るで」

ワタル「話が早いな」

カスミ「・・・ん。あ！ダーリン」

クーズ「ダーリン・・・だど・・・」

マサキ「そうや。わいの彼女や」

まさかの事実

ワタル「ふっ、リア充か。爆発しろー！！！！いけ、カイリユー」

「ガオーン」

クーズ「鳴き声、変だな」

マサキ「ちょっと面白いことしようやないか。我がイーブイ家族軍団！いけー！！」

イーブイ、シャワーズ、サンダース、ブースターが出てきた

ワタル「クズ君、手伝ってくれるか？」

クーズ「勿論！よし、ピチュー、いけ！」

「ピチューー！！」

カスミ「じゃあ私はイーブイとサンダース借りるわ」

マサキ「よしじゃあバトルや！」

まさかの四対二の勝負

ワタル「カイリユー！ドラゴンクロー」

狙いはマサキだった

マサキ「ちょ！わいを狙うな。シャワーズ、なみのり！」

なみのりに乗ったシャワーズを掴みカイリユーの攻撃を避けた

マサキ「ブースター。おにび！」

ワタル「避けて、みずのはどう！」

ブースターの、おにび、を避け、みずのはどうを放つ

マサキ「シャワーズ！みずのはどう、に突っ込むんや！」

カイリユーの、みずのはどう、を喰らう。だが特性ちよすい、で水タイプの攻撃を喰らうと体力が回復する

ワタル「ちっ。長引きそうだな」

カスミ「さあて。第二ラウンドとしましょうか」

クーズ「いいぜ。俺のピチュー、ナメんなよ！」

ものがたりのサイレント（後書き）

ツヤガ「9月10日って、くーじゅう、くーじゅ、クーズになるからクーズの日にしよう」

クーズ「まあいいけど。何かするのか？」

ツヤガ「そうだね。番外編にしようか」

クーズ「やったぜ。楽しみだな」

ツヤガ「フフフ。どう料理しようか」

クーズ「なんか悪人顔だぞ・・・」

番外編から飛び出した

ツヤガ「やった〜。久々の番外編だ〜」

クーズ「本文に出ていいのか？」

ツヤガ「いいの、いいの。よし。何しようかな〜」

クーズ「考えてなかったのかよ・・・ていうか撮っ」

ツヤガ「いや〜。数個考えてあるんだよね。1つは、ポケモンを喋らして色々。他は私とバトル。あとフラグの回収とか」

クーズ「・・・色々考えてたんだな」

ツヤガ「よし、じゃあ宣伝からいこう」

クーズ「いきなりだな」

ツヤガ「私の他の小説【今 ハンター達は】の応援よろしく〜」

クーズ「（こんな大胆な宣伝は、この小説くらいだろう・・・）」

ナチヤ「ということでは登場!〜」

クーズ「出るな!紛らわしいから出るな!」

ナチヤ「まあ主人公同士なんだからいいだろ？」

クーズ「いや、だって性格が・・・」

ツヤガ「うん。面倒なのとバラエティーが少ないから主人公と周りのキャラの性格は似てるよ」

ナチャ「皆さんも【今 ハンター達は】を見て確認してください」

クーズ「（もう帰りたい・・・）」

ツヤガ「まあ、今ハンは色んなキャラの練習してるから重要キャラだけ性格が似てるかな。じゃあ宣伝は、これまでにして」

そして周りが急に暗くなる

ツヤガ「皆さん、お待ちかね。9月10日、クーズの日、スペシャル回です」

スポットライトがツヤガに当たる

クーズ「おお」

ツヤガ「今回は【銀き冷気の力】をお送りします」

急にスクリーンが出てきた

クーズ「大変だったぜ」

ツヤガ「これはフィクションです。（小説と関係ない）設定的にはクーズが主人公の映画のような物だと思ってください」

子供「待つてゝ。待つてよゝ」

何か浮かんでる物体を追いかける子供

女性「あらあら。おおはしやぎね」

男性「そりゃ。この村の伝説的なポケモンだからな」

だがその時

ゴゴゴゴゴ

女性「！？雪崩」

男性「なに！？」

二人は必死に逃げる。だが雪崩のスピードには勝てない

子供「お母さん！お父さん！」

親の元に行こうとした子供

男性「馬鹿！来るんじゃない。俺たちは大丈夫だ。フリーズオ、ク
ーズを頼む！」

フリーズオは下に垂れている鎖でクーズを掴みに逃げた

クーズ「お父さん！！お母さん！！」

く現在く

ここはある雪が多く降る村。この村には特別なポケモンが住んでい
ると言われる

クーズ「あゝ。雪が止まないな」

今、季節は冬である。冬でこの村では雪が止むことは少ない

クーズ「しかし、毎日毎日疲れるな」

雪かきをしている。やらないと道が無くなる

「ピチュー！」

雪かきをしているクーズにあるポケモンが近付いてきた

クーズ「よお。今日も来たか」

このピチューは、たまに来るポケモンである

クーズ「ちょうど良かった。ピチュー、十万ボルト」

「ピチュー！」

十万ボルトで雪をぶっ飛ばす

クーズ「よし、雪かき終わり」

そして木の家に入る

クーズ「寒いって。はやく薪、薪」

え、薪に火を付けた

クーズ「ピチュー、寒いだろ？はい、プレゼント」

真っ赤なマフラーをピチューの首に巻く

「ピチュー！」

喜んでいようだ

クーズ「良かった。昨日頑張って作ったんだぜ」

そして暖かくなった部屋でピチューと遊ぶ。ちなみに撫でたりすると蹴られる

クーズ「腹減ったな。昼飯作るか」

昼飯を作るために厨房に行く。しかし、この時誰も知らない。強大な敵が近付いていることを

クーズ「ふう。お腹いっぱいだな」

昼飯を食べて満足なクーズとピチュー。その時

ドーン

クーズ「！？なんだ、この音は」

急いで外にでる。村長の家あたりから煙が出ている

クーズ「嫌な予感しかしないな。ピチュー行くぞ」

「ピチュー！」

クーズの肩に乗り、赤いマフラーを靡かせながら行く

村長「・・・お前は」

謎の人物「よお。腐れ親父」

村長を親父と言った少年は髪の毛が銀髪で逆立っている。ドクロな
どが模様の服や不吉なアクセサリーを着けている

村長「お前は、もうこの村と関係ないはずじゃ」

謎の人物「ざんねん。俺の入ってる組織から命令されてね」

村長「命令じゃと？」

謎の人物「ああ。この村に住んでいる、イッシュ地方でしか見られないポケモン。フリージオを捕まえにな！」

少しの間、村長は何かを思い出すように止まった

村長「あれは村の神様のような物。ナチャ、お前なんぞに渡すものか。いけ、マンムー」

ナチャ「ヒヤハハハ。雑魚がほづくな。殺れ、ブーバーン！」

2体のモンスターが対決する

クーズ「くそ。何度か爆発が起こってるな」

必死に村長の家に行こうとしてるが、なかなか着かない

村長「くっ・・・」

ナチャ「どうしたジジイ？もう終わりか？」

ブーバーン、一匹で村長の手持ちを全て倒した

ナチャ「んじゃ、終わりだな。死ね」

ブーバーンの腕が村長に向けられる

謎の人物「待てー！ー！！！」

ナチャ「ん？まあいい。ブーバーン、かえんほうしゃ」

かえんほうしゃをするために腕から火が漏れる

謎の人物「やろー！ピチュー、十万ボルト」

「ピチュー！」

ナチャ「ブーバーン。避ける」

直ぐ様、避け体勢を立て直す

クーズ「テメー。誰だ！？」

見た目から不良である

ナチャ「・・・お前、クーズか」

クーズ「・・・もしかして、ナチャか？」

ナチャ「ああ」

クーズ「良かった。で、爆発は何だったんだ？」

ナチャ「ククク」

笑いをこらえてるが無理だった

ナチャ「ハーハハハハ！馬鹿だな！クズ。俺が全部やったんだよ」

クーズ「なっ！？」

ナチャ「俺はあの頃の俺じゃない。もう誰にも邪魔させない！」

クーズ「・・・」

村長「クーズ」

村長がいつもより老けて見える

ナチャ「おいおい。まさか話してないのかよ。ありえねえな」

クーズ「村長・・・？」

村長「いつか話さなくてはと思っていたのじゃ。これは天気が快晴のある日のことじゃ」

番外編から飛び出した（後書き）

ツヤガ「もう普通にこの設定でポケモンが書きたかった」

クーズ「そんなこと言うなよ。他のキャラが寂しくなるだろ」

ツヤガ「そういえば都合上ナチヤを出しました」

クーズ「まあキャラが全然違うけどね」

ツヤガ「いや皆、設定では映画を撮っている設定なので、あのキャラはナチヤが作ったキャラになりますね」

クーズ「紛らわしい」

ツヤガ「あーちなみに本文にナチヤが出たのは、このためだよ。ただの宣伝じゃなかったんだよ」

クーズ「ああ、書いた後に思い付いた、ということが文章で分かるぞ」

ツヤガ「色々大変なんだよ。小説、書くのめさ」

番外編から四苦八苦

これは天気が快晴の日。今、村長とナチヤはある場所にいる

村長「ナチヤよ。お前も知ってると思うがこの村は地球の中心部にある」

ナチヤ「ああ。だから強いエネルギーがあると反応して天変地異が起こるんだろ」

村長「そうじゃ。・・・だから」

ナチヤ「・・・？」

村長「すまないな」

いきなりマンムーでナチヤを踏み潰そうとした

ナチヤ「（山に登ったのは、このためか）・・・まあ分かってたことだ」

マンムーの攻撃を避ける

村長「お前が生きていると、いつか世界が破滅する！それを知ってるだろ」

ナチヤ「だからって自分の息子を殺すのかよ・・・。いけ、ブーバー！！」

「ブーバー！」

村長「・・・やるしかないか」

二人の激しい争いが山で起きる

クーズ「までー！！」

今、クーズはフリージオを追いかけている

父親「フリージオも何かを感じてここに来たのかな？」

母親「さあ？でも村の守り神よ。追い出せないでしょ」

父親「追い出す気はないよ。でも不思議でさ」

村長「終わりじゃな」

ブーバーはやられている

村長「・・・本当にすまん」

マンムーの大きな足がナチヤに降り下ろされる

ナチヤ「（死にたくない！！！！）」

ナチャはまた避ける

村長「無駄じゃ！」

だがその時

ゴゴゴゴゴゴ

ナチャ「（雪崩！？よし逃げるチャンスだ）ブーバー、お願いだ。
かえんほうしゃー！！」

村長に向かって、かえんほうしゃが放たれる

村長「くっ。逃げられたか」

マンムーでガードしたが居なくなっていた

村長「わしも逃げないと危ないな」

そして雪崩はそのままクーズの両親を襲う

クーズ「お父さん！！お母さん！！」

ナチャ「まあ、そんな訳でクーズの両親を殺したのはこのジジイだ」

正確に言うとナチャも関係するが気にしない

クーズ「……」

村長「……クーズ」

ナチャ「ヒヤハハハハ。信頼してた奴が両親を殺して未だに話してなかった。楽しいな！」

しゃべり方は鬼柳を参考にしてください

クーズ「……確かに村長は俺の両親を殺したかもしれない」

ナチャ「かも、じゃねえ。殺したんだよ」

クーズ「だが今まで困ったことが助けてくれた。俺の両親の代わりをしてくれた。村長は充分に罪を償った!!」

ナチャ「ああ？それがどうした？殺したことには変わんねえよ」

クーズ「俺はお前のように自分の罪を認めないような奴の方が許せない！勝負だ、ナチャ!!」

ナチャ「はゝあん。まあ、そんな考えじゃ無意味なんだよ。いけ、ブーバーン」

「ブーバー」

クーズ「いけ！ピチユー」

「ピチユー！」

ナチャ「燃え尽きな。ブーバーン、かえんほうしゃ！」

ターゲットのピチューに腕を向ける

クーズ「ピチュー。十万ボルト！」

かえんほうしゃと十万ボルトがぶつかり大きな音と煙が発生する

クーズ「さらに十万ボルト！！」

ナチャ「ブーバーン。避ける」

煙の中から出てきた十万ボルトを避ける

ナチャ「ブーバーン、サイコキネシス！！」

ピチューの体が宙に浮く

クーズ「くっ」

ナチャ「どうした？何もしないなら殺るだけだ」

ブーバーンの腕がピチューに向けられる

クーズ「やらせるか！！ピチュー。かえんほうしゃと自分に、でんじは！」

ブーバーンの放たれた、かえんほうしゃはピチューの反発避けにより避けられる

ナチャ「面白いな。だがお前の勝ちはない」

クーズ「（確かに。ピチューじゃ無理か）」

「ピチュピチュ！」

何か怒っているような感じだ

クーズ「・・・そうだな。よしピチュー。でんこうせっか」

左右に素早い動きをしながらブーバーンに近づく

ナチャ「ハハハ！ブーバーン、ふんえん！！」

ブーバーンの肩などから火が勢い良く飛び出る

ナチャ「なに！？」

高速で移動しているピチューがブーバーンの攻撃を避けている

クーズ「流石！！ピチュー、十万ボルト！」

「ピイチュー！！！」

ギリギリまで近づき十万ボルトをブーバーンに当てる

ナチャ「ちっ。ブーバーン、えんまく！（あのピチュー。普通じゃねえな）」

「ブーバー」

えんまくにより周りが見えなくなる

クーズ「（どうするか）」

だが考える余裕は無かった。黒煙からブーバーンが飛び出してきた

ナチャ「ブーバーン、かみなりパンチ」

クーズ「！？ピチュー、避ける」

「ピチュー！」

「ブーバー！」

攻撃より回避の方が少し早かった。ピチューはジャンプして避ける

ナチャ「まだまだ！左手ではのおのパンチ！」

クーズ「ピチュー、でんじは！」

反発によりピチューは更に高く宙に浮く

ナチャ「ハハハハ。ブーバーン、ほのおのパンチの威力を乗せて、かえんほうしゃ——！」

ほのおのパンチの火をかえんほうしゃに混ぜる

クーズ「っ！？威力が」

とてもピチューじゃ太刀打ちできない威力のかえんほうしゃがピチューを襲う

ナチャ「空中じゃ身動きが取れねえし、技を撃った直後だから隙だらけだぜ」

クーズの手持ちはピチューしかない。ピチューが負ければクーズも負けになる

ナチャ「終わりだ！！燃えちまいな！！！」

ピチューがかえんほうしゃに当たる寸前

「ピロリロ（機械的な音）」

ナチャ&クーズ「！？」

れいとうビームがブーバーンのかえんほうしゃを相殺した

ナチャ「あいつは・・・」

クーズ「助けに来てくれたのかフリージオ！」

そこには村の守り神であるフリージオがいた

番外編から四苦八苦（後書き）

ツヤガ「ふ〜。だいぶ更新が遅れましたね」

クーズ「なんでだ？」

ツヤガ「言い訳になりますが、忙しいと他のゲームをしてたりと・・・」

クーズ「毎日少しでいいから書けよ・・・」

ツヤガ「いや、だって。ね〜」

クーズ「分からないからな」

ツヤガ「ちえ、んじゃ今回の話を。ブーバーンの鳴き声が個人的に読んで笑いました。そしてフリージオの鳴き声は・・・」

クーズ「まあ、アニメ見てないから鳴き声は難しいと思うぜ」

ツヤガ「気にしたら負けでいいですね。次回も番外編です」

番外編から床暖房

それは結晶。それは冬。それは化身。それは・・・

クーズ「フリージオ！来てくれたのか」

「ピロリロ」

クーズの顔にスリスリしてくるが冷たい

クーズ「（冷て！）フリージオ。分かったから、今バトル中」

親切にナチャは待っていた

ナチャ「まだか？」

こちらはブーバーンの熱を使い温まっていた

クーズ「ずるっ！てか、ピチューも」

ピチューも寒かったのか温まっていた

ナチャ「おし、んじゃ。仕切り直しだ！」

両者位置につく

ナチャ「そうだな。テメーにチャンスをやろう。フリージオとピチ

ユー。二匹使え」

クーズ「・・・分かった。だが、そしたら負けないぜ」

ナチャ「出来るもんならやってみな！！ブーバーン、かえんほうしや」

ピチューを狙って、かえんほうしやが放たれる

クーズ「フリーズオ。れいとうビーム！ピチュー、十万ボルト！」

技マシンの汎用技がバンバン出てきます

ピチューの十万ボルトはかえんほうしやを相殺、隙ができたブーバーンにれいとうビームが迫る

ナチャ「ブーバーン。ふんえん！！」

至るところから炎が飛び出る。そしてれいとうビームを相殺し、ピチュー達に攻撃をする

クーズ「技と技のぶつかり合いか。ピチュー、十万ボルトで打ち消せ！」

ふんえんの炎を、また相殺する

クーズ「フリーズオ。ブーバーンにきりさく！」

特殊型のフリーズオには、これをしてはいけない（本家のゲーム）

ナチャ「死にに來たか！ブーバーン。ほのおのパンチ」

ブーバーンの腕が炎に包まれフリージオを殴る

だが手応えが無かった

ナチャ「！？消えた」

クーズ「フリージオ。れいとうビーム！！」

いきなりブーバーンの後ろにフリージオが現れる

ナチャ「なに！？」

ブーバーンは反応出來ず、れいとうビームを喰らう

クーズ「フリージオは氷の結晶だぜ」

説明しよう！フリージオは設定で熱すぎると水蒸氣になる能力（？）
を持っている

ナチャ「なるほどな」

「ピチュ〜」

二人とも納得したようだ

クーズ「フリージオ！そのまま、れいとうビームで決めろ！」

から空きのブーバーンに、れいとうビームが襲う

ナチャ「甘い、甘い。ブーバーン、ふんえん」

れいとうビームをかき消し、フリージオの回りに、ふんえんが舞う

ナチャ「水蒸気のままじゃ自由自在には動けないだろ？」

ふんえんの檻にフリージオは捕まる

クーズ「ちつ。ピチュー、十万ボルト！」

ナチャ「そろそろ。お遊びは終わりだ！！ブーバーン、だいもんじ
！」

かえんほうしゃの比にならない威力のだいもんじがピチューを襲う

ナチャ「ハハハハ。苦しみ・・・そして死んでいけ！！」

急に空が明るくなる。だが急に気温も高くなる

村長「不味い。ナチャの力に地球のエネルギーが反応した！」

クーズ「くつ。雪の状態から、いつきに日照りかよ」

ナチャ「こりゃ好都合だな。ブーバーン、止めの一撃をお見舞いしてやれ」

「ブーバー」

だいもんじを喰らって動けないピチューにゼロ距離のかえんほうし

やが放たれようとしている

フリージオは日照りによる気温上昇とブーバーンの炎で固体に戻れない

「ピッ・・・チュ」

ナチャ「まあ、普通のピチューより強かったぜ。楽に逝きな」

しかしピチューには必ず守ってくれる王子様がいる

クーズ「やらせるかー!!」

ブーバーンの元にダッシュする

ナチャ「おいおい。何言っちゃってんの？ブーバーン、やれ」

クーズ「!？」

終わりが近いと時は早く進むか遅く進むか、両極端しかない

中間なんて存在しない。今回も例外ではない。時は遅く進む

（ピチューが殺られる。どうにかして助けないと・・・。だが俺には力がない、ピチューを助けられる力が・・・ない）

村長「こ・・・これは!？」

天氣がまた変化する

ナチャ「クーズの力に反応したか!？」

天氣は一転し、あられ状態になる

クーズ「・・・フリージオ!こおりのつぶて」

小さな氷は素早くブーバーンを襲う。怯んだ所でピチューを奪還した

ナチャ「ちつ。だが天氣でどうにかなると思うなよ。ブーバーン、一撃だ。一撃で終わらせる!オーバーヒート!!!」

これまでにない炎がブーバーンから迸る

ナチャ「・・・この世の万物を凍らせる冷氣!フリージオ、ぜったいれいど!!」

「ブーバー!」

「ピロリロ!」

紅蓮の炎と蒼霞の氷がぶつかり合う

ナチャ「くっそ・・・」

フリージオのぜったいれいどがブーバーンのオーバーヒート呑み込みブーバーンを凍らせる

クーズ「勝ったんだよな」

自分の家でボーツとしている

そこには氷の結晶とツンデレな雷がいる

あの戦いに勝利したクーズ。だがまだ解けてない謎はある

クーズ「この手の話はさ。終わらせ方が分からないよな」

「ピチュ」「ピロリロ」

番外編から床暖房（後書き）

ツヤガ「2ヶ月投稿してませんでしたね」。色々やりたいことがあるので早く投稿出来ません

そこは謝ります。あと今日投稿したのは誰かさんが投稿したのを、たまたま見たからです

では ノシ」

ものがたりの美

今、カスミとクーズ。マサキとワタルでバトルをしている

相手は2体。こっちは1体だが・・・

クーズ「（サンダースには電気技が効かない）なら修行の成果を見せる時が来たようだな！」

「ピチュ！」

ピチュは赤い鉢巻きを頭に巻く

カスミ「そんな装飾品付けたって無駄よ。サンダース、めざめるパワー。イーブイ、すなかけ」

タイプが分からない、めざめるパワーに、すなかけがピチュを襲う

クーズ「師匠の教わったことを実践するときだ。ピチュ、避ける！」

ピチュは目を瞑る

師匠「目で感じるのではない！第六感、心の目で感じるのだ！」

カスミ「!？」

大量のめざめるパワーと、すなかけがピチューを襲うが上手くかわす

クーズ「師匠の教わったことは無駄じゃなかったんだな」

「これは洞窟を抜けてすぐ」

謎の人物「おい！待つんだ。その少年」

クーズに話しかけてきたのは柔道着を来ている、からておうだ

クーズ「？たしかファイヤーレッドだと技を教えてくれるんだっけ」

メガトンパンチとメガトンキックを教えてくれる（二人だが）けっ
こう無駄な技、教えの人です

からておう「そんなのはどうでもいい。それより、そのピチュー。
そいつは私の予想ではかなり伸びる」

クーズ「え？背が!」

「ピチュー」

ピチューは自分が背が高くなった時をイメージしている

からておう「ちがーう!!力が強くなるということだ!」

クーズ「ですよね」

からておう「どうだ？ちょっと一緒に修行してみないか？」

クーズとピチューは目を合わせる

クーズ「まあ急ぎ旅じゃないので、いいですよ」

その日からクーズと、からておう（師匠）との修行の日々が始まった
ある時は泣いたり。ある時は苦しんだり。ある時は不味くて吐きそ
うだったり

覚えているのは食事のことぐらいだ

そして長い師匠との修行が終わった

クーズ「この三日間。一年間に感じた・・・」

食事が相当不味かったらしく死にそうである

師匠「ふむ。もう教えることはないな。よしクーズよ。お前のピチ
ューは一回りも二回りも強くなった」

「ピチュー？」

見た目は全く変わっていない

師匠「これを持っていけ」

師匠のハチマキを貰った

クーズ「これは？」

師匠「お前と私の修行をいつでも思い出すためだ」

クーズ「・・・師匠。ありがとな！」

クーズ「あの食事。今、思い出しても吐き気がする・・・」

だがピチューは確かに強くなっている

カスミ「何が修行よ。サンダース、でんこうせっか」

クーズ「やってやれ。ピチュー、マッハパンチ！」

格闘小説になりそうな予感がする

ピチューのマッハパンチがサンダースに直撃する

でんこうせっかの威力もあって、かなりのダメージだ

カスミ「！？なら、イーブイ。だましうち」

ピチューに攻撃をするフェイントし攻撃する

クーズ「ピチュー、カウンター」

イーブイの攻撃に反応してピチューはカウンターを放つ。そしてイーブイは吹っ飛ぶ

カスミ「何よ、あのピチュー。物理技が全然効かない」

クーズ「よし、止めだ。ピチュー、十万ボルト！」

イーブイに放たれる

カスミ「・・・！？まだ勝ち目はある。サンダース、イーブイを守って」

サンダースの素早さは異常だ。イーブイを守るため十万ボルトを受ける

クーズ「くっ。ちくでんか」

カスミ「見せてあげるわ。イーブイのとおきおきの技を！イーブイ、とおきおき！」

駄洒落っぽい言葉を言いながら攻撃する

クーズ「ピチュー、避ける！」

また目を瞑る

カスミ「させないわ。サンダース、十万ボルト」

ピチューはとおきおきの技に集中してたため十万ボルトを喰らう。

そして集中力がきれた

クーズ「！？ピチュー」

イーブイのとおきが直撃する

「ピチュー」

カスミ「集中してないと避けられないようね。さらに集中できるのは1つの技だけ」

クーズ「（完全に攻略されたな。どうする）」

ピチューは辛うじて立つ

カスミ「終わりよ。イーブイ、とおき。サンダース、十万ボルト」

「ブイ！」「サンダー！」

二匹の技が放たれようとした時

ワタル「カイリユー。はかいこうせん」

カスミ「！？」

ワタルのカイリユーの、はかいこうせんで二匹は一気に戦闘不能になる

ワタル「遅くなってしまったな。クズ君、後始末は僕がやるよ。だ

から君は出ていいよ」

クーズ「いや、でも」

ワタルはマサキを抱えていたがマサキは原型を止めてない

クーズ「（ああ、やばいな）わかりました」

そしてピチューを連れて急遽ジムを出た

クーズ「あ！バッチ」

確認したらいつの間にか手に入れている

クーズ「ホント、このゲーム。よく分からないよな」

そしてクーズはポケモンセンターに行き、次の町に行くのを備えた

ものがたりの美（後書き）

ツヤガ「ふう。疲れました。気分で投稿するので次はいつになるかな」

クーズ「ていうかピチューを強化しすぎじゃないか？」

ツヤガ「大丈夫です。ドジョッチと一緒に重要な時でしか補正は効かないから」

クーズ「・・・それならいいけど」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8394v/>

ポケットモンスターの可能性

2011年11月6日11時23分発行